

郷土博 通信

No.18

2021 秋



源内焼「子育駒」(解説8頁)



CONTENTS

■ 源内焼「子育駒」	1	■ シーボルトが見た与島の“たで場”(上)	5~7
■ 展示室の紹介	2~3	■ 源内焼「子育駒」について	8
■ 鑄造体験講座	4	■ INFORMATION	8

第1展示室

(展示期間:10月~3月)

江戸時代の表彰記録『官刻 孝義録』

1789(寛政元)年、江戸幕府の老中松平定信は「寛政の改革」の民衆教化策のひとつとして、江戸時代初期から全国各地の諸藩で実施されてきた善行者などの表彰について、幕府に文書で提出するように命じました。集められた表彰者の事例データは、1801(享和元)年に『官刻 孝義録』として全50巻(冊)にまとめられ、木版印刷で刊行・頒布されました。その当時の政府(=江戸幕府)が印刷発行した書物であるため、「官刻」の文字が付いています。これには日本国内の65ヶ国、8,600人を超える個人や団体が収録されており、江戸時代の人々の日常生活がうかがえる貴重な資料といえます。

第40巻目(図1)は、讃岐国1ヶ国(高松藩と丸亀藩)のデータが1冊に仕立てられていて、「孝行者、兄弟睦者、奇特者」などの表彰名目で88人が列記されています。最古の事例が1742(寛保2)年で、1791(寛政3)年までの約50年間の表彰記録となっています。記載形式として、表彰名目、所属する国(藩領、代官領など)の名称、郡名・村名・町名、身分や職種、個人名、年齢、表彰年が順に記されています(図2)。

88人の列記に続いて、その内の11人がどのような善行を行って表彰されることになったのか、その内容が文章で記されています。その内の一人・権四郎(図3)の事例を以下に紹介します。

【要約】

鵜足郡東川津村(坂出市川津町)の百姓権四郎は、父を早くに失い、母と病身の兄と兄嫁の4人で暮らしていました。一石あまりの痩せた田畑がありましたが実りは少なく、権四郎一人で3人を養うことはむずかしく年々困窮していましたが、日雇い仕事につくことができからは、自分は粗食ながら、母親の口になうものを与えることができるようになりました。母親は、兄夫婦と別居して、権四郎に嫁を迎えることを勧めましたが、兄夫婦から反感を買い、嫁を迎えて自分が心変わりして母親をおろそかにしてはいけないからと独身を通し、母を最期まで支えました。孝行者権四郎の噂は近隣だけでなく、藩主にも聞こえ、1784(天明4)年に褒美として米が与えられました。

権四郎が自らを犠牲にしながら、ひたすら親兄弟の生活を支えるさまは、当時の人々にとって感心するところであり、親孝行が表彰の対象となることを広く知らせることになったといえます。

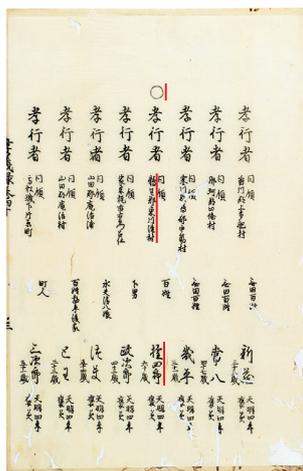
この『官刻 孝義録』の編集・刊行を江戸幕府老中松平定信に勧めたのは、讃岐出身の儒学者柴野栗山だったと言われています。また、近年の研究では、岡山藩が1789(寛政元)年に刊行した『備前国孝子伝』が、『官刻 孝義録』編纂に影響を与えたとする説もみられます。

今回の展示では、『官刻 孝義録』とその関連資料などから、江戸時代の人々の生きざまを見てみようとします。(齊藤 祐司)

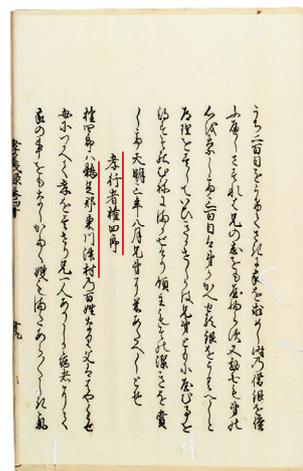
『官刻 孝義録 巻四十 讃岐』



▲図1 (表紙部分)



▲図2 (88人の列記)



▲図3 (表彰内容の記載)



第3展示室

展示期間:10月~3月

讃岐の中世瓦 ー東部を中心にー

前回の展示では、丸亀以西の瓦をご紹介しました。今回は東部の瓦をご紹介するとともに、香川県全域の中世瓦についてもご覧いただきたいと思います。

香川県東部の中世瓦もまた西部と同様に軒丸瓦の文様の中心は巴文であること、寺院の他に神社でも瓦を使いはじめ、さらに中世末には城でも使われるようになるなど、結果的に県内全体で同じ傾向が見られました。

ここで香川県の瓦の出土地についてまとめて見てみましょう。

そもそも瓦は仏教とともに大陸からもたらされたものです。古代の仏教は国家を守護し安定させるためのもので、国家や豪族の権威の象徴でもありました。県内では幹線道路である南海道を中心に国分寺(高松市)などの古代寺院が確認され、古代瓦が出土しています。それに対し、中世の仏教は個人の救済を掲げたいわゆる鎌倉仏教の広がりにより、民衆に浸透していきました。その動きに呼応するかのよう、南海道から外れた各地でも寺院が建てられるようになり、地域的な広がりを確認できます。

神社でも、平安時代末頃から瓦が使われ始めたようです。讃岐国一宮の田村神社(高松市)、二宮の大水上神社(三豊市)、国宝の本殿をもつ神谷神社(坂出市)などの神社から瓦が出土しています。神道は山や岩など自然の一部を神が宿る場所として神聖視し祀っていたため、当初は建造物を持っていませんでした。しかし仏教の影響で神殿(本殿)や拝殿などの建物が建てられるようになり、その後、その屋根に瓦を使用するようになったと推定されます。

中世の山城は、山頂や尾根を削って平坦地をつくり、周囲に土塁や堀を築いた軍事施設です。織田信長の安土城以降の近世城郭から本格的に瓦を使用したため、中世末には城域内に仏堂のようなものがあつたか、あるいは別の建前に前駆的に使用されたものと思われる。

今回、香川県全域の中世瓦を概観し、巴文の形状変化に着目しました。巴文はシンプルな文様であるため年代的特徴がつかみづらいのですが、詳細に観察すると、平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけて登場したばかりの巴文はくびれが無く、一筆でさっと描いたような形をしています(図1)。同時期に小さな巴文を連ねて配した連巴文軒平瓦(図2)がありますが、その巴文も同様の特徴を備えています。一方、中世末の城跡から出土する軒丸瓦の巴文(図3)はオタマジャクシのような形をしており、近世になると、現代の私たちがイメージする勾玉のような巴文へと変化します(図4)。大まかではありますが、くびれの無いものから徐々に頭がふくらみ、くびれができていく変化が見て取れます。

中世の瓦についてはまだ不明なことが多くあります。瓦から読み取れるさまざまな情報を通じて人間社会の動きを解明するため、今後の研究が待たれます。(宮武 尚美)

▲図1 右巻巴文軒丸瓦
(加茂神社)▲図2 連巴文軒平瓦
(加茂神社)▲図3 右巻巴文軒丸瓦
(雨滝山城跡)▲図4 右巻巴文軒丸瓦
(高松城)

鑄造体験講座

体験講座を終えて
織田比呂子

高松市埋蔵文化財センター

ちゅうぞうたいけん 「鑄造体験をしてみよう!」

2021年7月31日、鎌田共済会郷土博物館で開催された「鑄造体験をしてみよう!」では、高松市埋蔵文化財センターの職員が出張講師を務め、参加者6名ずつ計3回の講座を実施しました。

参加者は小中学生やその保護者、社会人の方と様々でしたが、鑄造体験は初めての方ばかり。鑄型に金属を流し込む場面では緊張した表情が見られましたが、手を真っ黒にして磨き上げた鏡や銅鐸をお互いに見せ合う参加者たちは、ピカピカ笑顔が輝いていました。

今回は「鑄造」と、大人も子供も夢中になる「鑄造体験」について紹介します。



●鑄造とは・・・?

鑄造とは、石や粘土で造られた鑄型に金属（主に青銅や鉄）やガラスを溶かして流し込み、様々な道具を作る加工方法のことです。鑄造には、複雑な形状であっても加工も大量生産も可能であるという特徴があります。日本には弥生時代に技術が伝わり、銅鐸や銅剣、銅鏡等の青銅製品がさかんに作られるようになりました。

●磨きを極める!鑄造体験

金属（低融点合金）を溶かしてシリコン製の鑄型に流し入れると、約5分で固まります。鑄型から取り出し、削り、紙やすりや金属ミガキ液で研磨して仕上げます。当センターの鑄造体験は、鑄型を6種類から選べることで、くっきりと美しい文様や文字が鑄上がり、まるで本物のような金属器作りを1時間弱で楽しめることが特徴です。1年を通して、大人の余暇に、子どもも歴史体験にと県内外から希望者が訪れます。



たかまつの 地面の下に 何がある?

高松市埋蔵文化財センターは、高松の歴史と文化を未来へ伝え、守ることを責務としています。地面の下にある高松の歴史（埋蔵文化財）を調査研究し、資料の整理や保管、公開活用を行っています。

鑄型は6種類



①高松城のしゃちほこ たまもん



②水にかかわる祈りの儀式
居石遺跡出土の銅鏡



③石清尾山古墳群
猫塚古墳出土の銅鏃



④奈良時代のお金
和同開珎



⑤三角縁神獸鏡



⑥伝讃岐国出土
袈裟禪文銅鐸

かまはく百年手帖 (二)

※郷土博物館はまもなく開館100年を迎えます。この間多くの人が交差しいろいろな出来事が起きています。その中から貴重なもの興味深いものを取り上げ、『かまはく百年手帖』と題して紹介します。

シーボルトが見た与島の“たで場” (上)

はじめに

キリスト教宣教師、朝鮮通信使、オランダ商館員など多くの異人たちが、江戸時代に瀬戸内海を旅し、目にした風景を記録に残している。

その中の一つであるシーボルトの紀行文を翻訳していた呉秀三は、訳文の一部に何かしっくりこないものを感じていた。屋島にある村の名前が「塩飽」というのである。この屋島が源平古戦場の屋島(高松市屋島東町他)ならば塩飽(坂出・丸亀市の島しょ部)は離れすぎていないか。村には石造りの立派な船の修繕所があるが、その島は屋島で間違いないのか、それとも別の島なのか、正確な情報がほしかった。

呉は香川県知事宛てに質問状を送った(図1)。

1927(昭和2)年9月末頃のことである。回答は当時香川県史蹟名勝天然記念物調査会の委員でもあった鎌田共済会おかただださちの岡田唯吉に委ねられた。この時の書簡や記録類が冊子にまとめられ当館に保管されている。

調査はどのように進められ、「屋島」と「塩飽」の関係はどう解釈されたのか、そして「船の修繕所」はどこに所在したのだろうか。

1 ことのはじめ ～呉秀三の手紙～

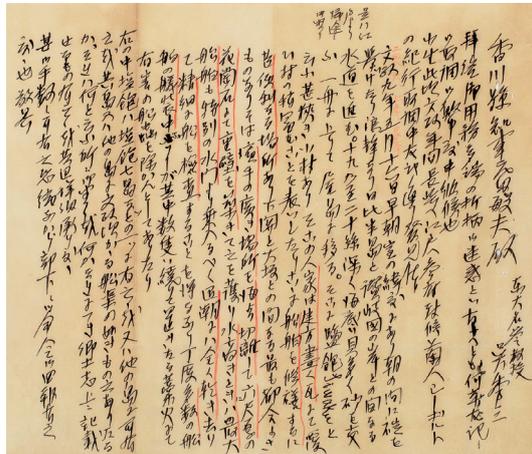
呉秀三は、明治～昭和前期の精神病学者である。ヨーロッパ留学を終えた1901(明治33)年、母校東京大学の教授に就任した。その後病院長時代には精神病患者の扱いの改善に努め近代精神病学の建設者と評されている。また医学史にも造詣が深く、1926(昭和元)年シーボルト日本渡来百年を記念して『シーボルト先生其生涯及功業』を著述している。

さて、ことのはじめとなった呉から元田敏夫香川県知事にあてた手紙を現代文に要約すると次のようになる。

拝啓、ご用務多端の折ご迷惑とは存じますがなにとぞ次の調査をお願いします。

私はこの頃、江戸時代の文政年間に江戸へ出向いたシーボルトの紀行文を調べている中で、次のような記述を見つけました。

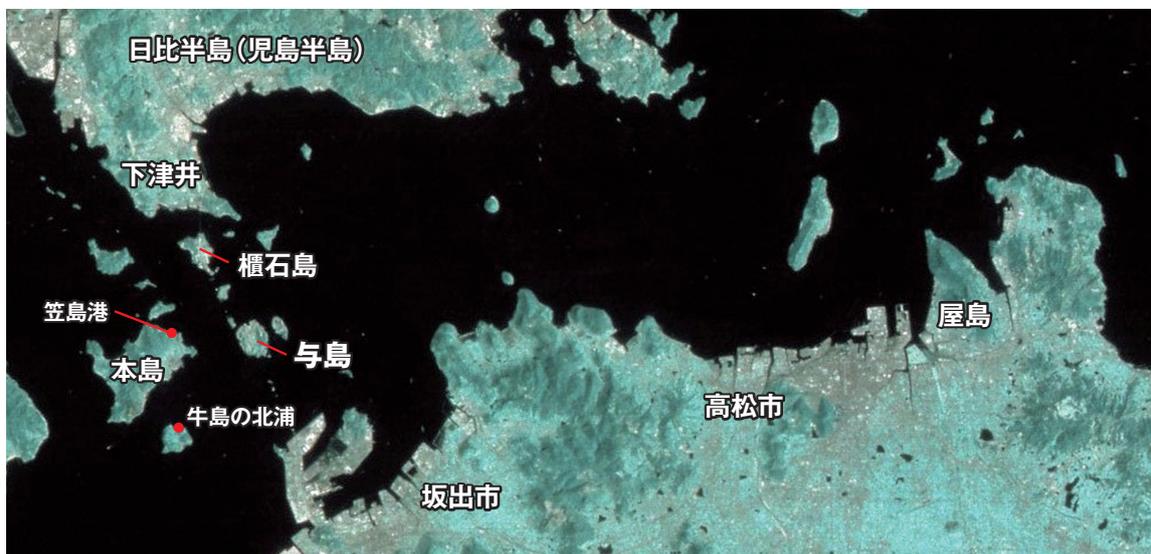
文政9年5月16日早朝、室の沖合にいる。朝の間に碇を上げた。浪は静である。日比半島と讃岐国の岸との間を進む。水深は28.5～30mと深く、海底は砂地で貝が多く交っている。一艘の舟に乗って屋島に移る。そこに塩飽Siwakuと云う甚だ狭い小村があった。その人家はすべて瓦葺で、村が裕福であることを表している。ここは船舶を修繕するに大変便利な場所で、下関と大坂との間にあり最も都合がよい所である。修繕所は厚さ1.8mの花崗石で石垣を築き砂浜の広い場所を海より切り離しているもので、満潮時に大きな船舶も特別の水門より乗り入れ、干潮時に精細に船を検査することができる。丁度多数の船舶が艀装中で、そのうちの数隻は船底近くに置いている藁火で有害な船虫を駆除しようとしていた。



▲図1 呉秀三から香川県知事宛ての手紙

この文中の塩飽は塩飽七島などの一つでしょうか。それとも他の島でしょうか。いずれの島であっても文政頃に船渠のようなものがあったのでしょうか。それは何と云う所にあり、それについて記録したものがあるのかなど詳細を知りたく思っております。はなはだお手数をおかけし恐縮ですが、調査の上ご返信ください。

2 シーボルトと江戸参府



▲図2 備讃瀬戸写真(ランドサット衛星画像[NASA]より)

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは、日本の歴史に登場する外国人の中で馴染み深い一人であろう。1823(文政6)年長崎出島の商館付き医師として来日し、6年間日本で過ごした。その間日本人に医学その他の科学を伝授する傍ら、日本に関する調査も行ない、収集した多くの資料を母国ドイツに持ち帰り、『日本』『日本植物誌』『日本動物誌』などの書籍にまとめた。

呉が調べていた紀行文は、オランダ商館長が将軍に拝謁・献上品を贈る行事である江戸参府にシーボルトも随行し、瀬戸内海を船で旅した際のもので、復路の様子を記している。当日出発地であった室は、現在の兵庫県たつの市室津で、古くから天然の良港として知られるところである。ここから南西に舳先を向け昼頃に到達した海域での出来事である。

ちなみに、シーボルトが塩飽村に上陸した1825(文政9)年5月16日は、久米通賢による坂出塩田工事の地鎮祭が執り行われる5日前である。

3 岡田の最初の回答

呉からの手紙を受け取った岡田は、早速次のような返信をしている。

先年、塩飽島の歴史については幾分調査研究したが、既に破壊・消滅した造船所跡はほったらかしにしていた。シーボルトの紀行文に造船所の構造を細々と記していることを発見され、有力史料の存在を教示いただき感謝します。

とりあえず現時点で小生が知っていることをお答えするとともに疑問点もあるので、ご教示ください。シーボルトの船は測量しながら航海していたのでしょうか。また屋島と塩飽は近接しているように書いていますが、実際の地理と合いません。室を出発して西進するなら屋島に寄るよりも日比半島と讃岐海岸の間の水道を進むはずですが。そして、シーボルトが塩飽と呼ぶ小島は、牛島のことでないでしょうか。造船所のある所は牛島の北浦と思われる、近々実地調査の上さらなる報告を差し上げることにします。

4 呉からの返信とその後

上記の岡田の初回答は10月2日付けで、その2日後には呉からの返信が届いている。

屋島について、岡田の方角違いとの指摘はそのとおりと賛成し、とすればヤシマの島は源平の島ではなく、他のヤシマなのだろうかお考えを伺いたいと述べている。そして、シーボルト以外にもケンペルの紀行文に類似の記載があることを次のように伝えている。

1691(元禄4)年、東インド会社のドイツ人医師ケンペルの江戸参府記に下津井のことを記している。

同市は三区に分かれ人家は凡そ四・五百戸で、各区に一人の与力がいて支配している。これに対して、右のほうに(西から東に航行)自然石で築いたシワク sijwaku の城がある(付図には Sijwaki とある)。

すなわちシワクの城、シワキの島というのはやはり塩飽かと思う。^{ひつししま}櫃石島か筆石島に下津井に面して城があったのだろうか。立派な邸宅もあったのだろうかお伺いしたい。また塩飽七島というのは何々の七島になるのかについても教えてください。



▲図3 岡田唯吉

この呉からの返信を受けて、岡田は早速、櫃石小学校長中北武助等に城跡について照会し、その返事が残されている。また本島村長田中茂穂から岡田への回答もあり、10月中に精力的に調査を行っていたことが残された手紙類から窺える。

それらの結果として、10月20日に岡田はそれまでの調査成果をまとめ、呉に報告している。

以上が、当館に保管されている資料の要点である。

呉の翻訳は順調に進んだようで、翌年1月に『異国叢書シーボルト江戸参府紀行』として発刊された。この書籍は県内では現在多度津町立明德図書館に所蔵されており、該当箇所を読んだところ「屋島」は「^{よしま}与島」に修正されていた。

与島は塩飽諸島の一つであるから、村の名が塩飽でも不自然さはない。するとこれに続いて記述されている船の修繕所は与島に所在したと理解するのが自然であろう。

しかし修繕所については、本島の笠島港を描いた挿図と詳細な説明があるものの、与島については全く触れられていない。

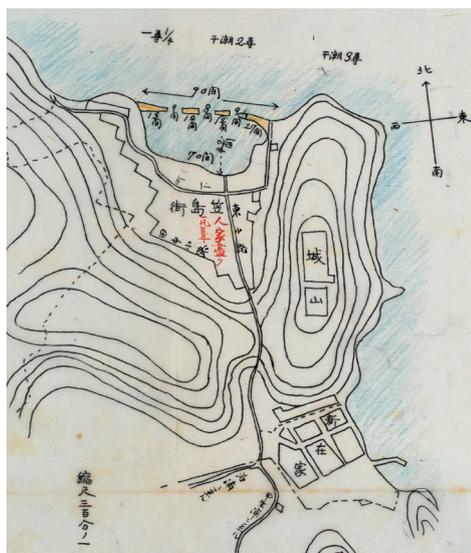
これはなぜなのだろうか。与島に船の修繕所はなかったのであろうか。修繕所は江戸時代には「たでは・焚場」と呼ばれ、与島に所在したことが近年の研究で明らかになってきている。

次号では、この与島のたで場を詳しく見ていくことにする。

(館長 大山 真充)

【引用・参考文献】

- ・鎌田共済会郷土博物館資料「岡田文庫79/元禄年間櫃石島城跡有無ノ調査・文政年間牛島・笠島造船所二関スル調査・伊セ参宮琴平参詣者二対スル珍伝説」『資料目録(続編)』1983
- ・呉秀三訳注『異国叢書 シーボルト江戸参府紀行』駿南社 1928
- ・西田正憲『瀬戸内海の発見』中公新書 1999



▲図4 笠島港の図
(挿図の原本と思われる当館所蔵図)

源内焼「子育て駒」

幅9.3×奥行16.4×高20.3cm

(表紙解説)

表紙でご紹介しているのは、源内焼「子育て駒」です。

源内焼は1755(宝暦5)年に平賀源内(1728-1779)が堺屋源吾、脇田舜民、赤松^{しょうざん}松山ら志度の陶工を指導して始めました。軟質の施釉陶器で緑・黄・褐色など鮮やかな色彩を持つことが特徴で、型を使用して皿や鉢などが大量生産されています。デザインは、中国古典を題材とし中国の人物画など古典的なものがある一方で、世界図や外国産の鳥類など斬新なものもあり、実用というよりは鑑賞するために作られました。海外への輸出も視野に入れていたと言われています。

今回の「子育て駒」は鞍の部分に穴あきの蓋にした香炉で、緑・黄・白の鮮やかな釉薬で色付けられています。胸に「奥州 三春大明神 子育て駒」、腹に「安永三年 甲午正月元旦 平賀鳩溪 謹模造」(鳩溪は源内の号のひとつ)と陰刻されています(8頁右下)が、他の同型の作品にも同様に刻まれていることから、決まり文句として入れられたものと思われます。また首の後ろに3つ、お尻に1つの小さな穴があり、毛を差し込んでタテガミと尻尾を表現しようとしたことが推定されます。モデルとなった三春駒は、福島県郡山市を中心で作られている木製の郷土玩具で、子育ての縁起物として知られています。その起源は古く、平安時代、坂上田村麻呂が蝦夷を攻めた際に援軍として現れた馬群に由来するそうです。

平賀源内と聞くと何を思い浮かべますか? 「お神酒天神」のエピソードですか? エレキテルでしょうか? 源内の活躍はそれだけに留まりません。学者として『^{ぶつるいひんしつ}物類品鑑』を著し、蘭画家として「西洋婦人図」を描き、文士として『^{ねなしぐさ}根南志具佐』や『^{しんれい やぐちのわたし}神霊矢口渡』を著すなど、多岐にわたります。深い親交のあった杉田玄白はそんな源内を評し、梓を超越した「非常の人」と表現して墓碑銘に刻みしました。

(宮武 尚美)

※2022年3月までロビーにて展示しています。

INFORMATION

■鎌田共済会郷土博物館 第11回公開講座

「中世の讃岐

—武士の誕生と讃岐の人びと—

2021年10月16日(土)

13:30~15:00(開場13:00)

会場:坂出市民ふれあい会館 2階
(鎌田共済会郷土博物館西隣)

講師:上野 進(徳島文理大学教授)

【申込9月21日(火)から、先着40名、参加無料】

電話・FAXかHPのフォームからお申込み下さい。

電話:0877-46-2275 FAX:0877-45-0035

HP: <https://www.kamahaku.jp/>

※本講座は、新型コロナウイルスの感染拡大状況によって、中止になる場合があります。



鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分

岡山から…快速マリンライナーで約40分

JR予讃線坂出駅から徒歩5分

※駐車場あり

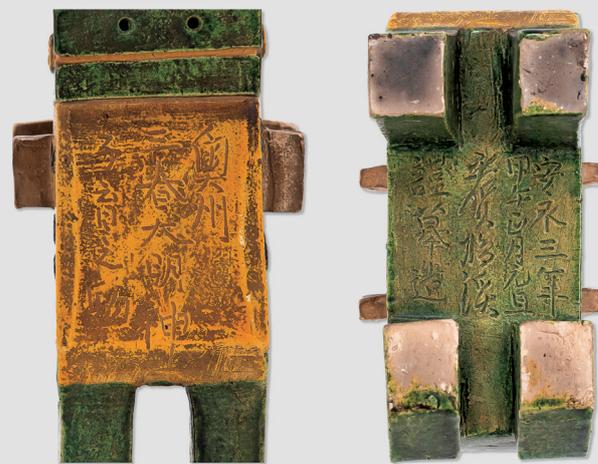
開館時間:午前9時30分~午後4時30分(入館は4時まで)

休館日:月曜日/祝日

夏季特別(8月13日~15日)

年末年始(12月29日~1月4日)

入館料:無料



▲胸部

「子育て駒」の陰刻

▲腹部